

乃木大将農装像のいはれ

陸軍大将乃木希典伯爵は単なる武骨一点張りの人ではありませんでした。武人としては無論ですが、その真摯誠忠、至誠奉公を見行はし給うた明治天皇が、明治四十年、囑するに学習院院長を以てし給ひし一事が、正に乃木大将の全人格を表徴してゐます。

乃木大将は中将であつた明治二十九年十月に台湾総督に任ぜられ、一年も経たぬ三十年十一月に辞表を提出、三十一年二月依願免職、休職を仰付けられてをられます。何故でせうか。乃木中将の台湾総督就任は現地の一般人からは歓迎されましたが「統治方針の高邁さに比べ、手足となるべき部下官吏の程度の低さ」「一切の情実を拒否した乃木の潔癖さが、一部官民の不評を買つたのは事実で、乃木も貪官汚吏の存在に手を焼いた」(『名将乃木希典』桑原嶽著)といふ事情があつたのです。この台湾総督辞任の少し後のこと、或る商人が儲け話を持込んださうです。素より將軍は一顧だにされず「武士は玉も黄金もなにかせむいのちにかへて名こそをしけれ」とお詠みになつたのです。

乃木將軍はその輝かしい軍歴の中に珍しいことに数回の休職をしてをられる。恐らく大なり小なり前述の如き事が要因であらう。その休職閑居中の明治二十四年に栃木県那須に別荘、とは名ばかり。百姓家を購入、休職中は主に農事に勤しんでをられた。

千里の名馬はただ安閑と駄馬の中に在つて呆けてをられた訳ではない。明治二十五年の「那須野」と題する三篇の漢詩には「炉辺日々兵書ニ注ス」「炉辺日々兵書ヲ読ム」「疎簾雨ヲ隔テテ農書ヲ読ム」の句が見える。一挿話を御紹介しよう。

時は將軍休職中の明治三十五年、この年九州の地に於て陸軍特別大演習が行はれた。その折、大演習統監の為行幸遊ばされた明治天皇は、嘗ての西南の役の激戦地田原坂にて「演習地にて」と題して「もののふのせめたたかひし田原坂まつも老木となりにけるかな」と詠ませ給ひ、側近を通じて、休職中にも拘らず演習に参加してゐた乃木將軍に下賜し給うたのである。武人乃木希典の面目躍如たるものがある。

さて前記漢詩の一節には「寒厨寧^{かんちゆうなん}ゾ嘆カン食^{うを}ニ魚無キヲ。手ヅカラ種^うエシ新蔬^そ味余リ有リ」とある。「蔬は「あをもの」で、食用の蔬菜類である。意識すれば「貧しい台所事情ではあるが、魚が無いなど何で嘆くことがあらうか。自分で栽培した新鮮な野菜が美味しく、頬が落ちるやうではないか」。

以下は將軍の親族長谷川君江女史が中央乃木会の機関誌「洗心」(第五十号・昭和五十三年七月一日)に寄せられた「乃木大将の農装像について」なる一文を参考にしつつ記します。

將軍の甥の一人に四十一歳年下の長谷川栄作といふ方がゐました。この方は身体がさう丈夫ではなく、

軍人にも百姓にも向かないやうな方だつたさうですが、彫刻の才に長けてをり、その道の師にも就き、彫刻の勉強中、日露戦争後に脚氣の転地療養に伯父である將軍の別荘に居候してゐました。或る日、將軍の農事の手伝ひをしてゐたところ、その碌に稲刈りも出来ない様子を見た將軍は、彫刻家になるつもりなら、手始めに、この乃木の像を造つてみなさい、と勧められ、その時に造られたのが、野良着に麦藁帽子で、その麦藁帽子に手をやり、やや上を見てをられる一尺五寸ばかりの像でした。乃木神社ではこれを「農装像―一」とされてゐて現在は下関の長府博物館に保存されてゐる由。

明治四十五年春、栄作氏は將軍から、前のは氣に入つたが、今度は今少し大きいのを、と所望され、早速制作に取掛かられましたが、何分にも公務多忙の將軍のことゆゑ、特に顔の写生の時間が中々とれぬまま、遂に明治天皇の崩御、御代替りとなり、九月十日栄作氏は赤坂の乃木邸に行かれました。前掲の一文に長谷川栄作氏本人が大正十五年に書かれた由の文が引用されてゐますので此処に抄出します。仮名遣に新旧混淆はありますが、その俣引用しました。

折から正装姿の伯父は、玄關に佩劍の音をたてて歸られたのでした。私達は二階の応接室で挨拶をしました。この時午後の日は、西側の窓の日除けに赤々と反射してしま^まりましたが、服忌以来、髯にも髪にも刃を入れられず、銀線の如き髯に掩はれた伯父の顔にその夕陽が輝いて、威風颯爽たる姿は、かつて、私の知らない程の威嚴を備へその莊重な氣持は実に室を圧する如く感ぜられたのです。

(中略)

やがて私に向つて

「栄作・・・彫刻はどうした・・・己の生きてゐるうちにはとても出来まいのう・・・どうぢや・・・」
こう云はれたので、いやそんな事はありませんと答へたのですが、その時は余り氣にも止めず、いつもながらの皮肉であろう、くらいにしか考へなかつたのですが、その言葉が三日後に至つて、始めて意味深いものであつたことを知りました。即ちそれは、伯父の殉死でした。私は如何ばかり制作のおくれたことを、心の裡で詫びたことでせう。

これが野良着姿で、鍬を地面に突いて立つてをられる像であり、「農装像―二」とされてゐるもので高さは二尺ばかりです。

此の度、縁あつて東京の乃木神社より富山縣護國神社に此の「農装像―二」を御奉納頂いた次第であり、当神社でも偉大なる乃木大将の御精神の継承、普及の資と致したく此処に安置、展示するものです。